

仏様の指

学校長 藤本光世

長野県の諏訪高等女学校（現在の諏訪二葉高校）に国語科教師として赴任され、戦後は東京で新制中学の教師に転出し、作文指導や、単元学習など数多くのユニークで実践的な指導を重ねられた国語の大村はま先生をご存知でしょうか。著書「教えるということ」の文庫版の表紙にある紹介には、優劣の意識を越えたところで生徒を授業に熱中させる、新鮮で画期的な「大村国語教室」は子供たちを育てるばかりではなく、教師・研究者・親にも貴重な刺激を与えてきた、とあります。著書も多数あります。

「教えるということ」を読むと、表題の題で、奥田正造先生のことが書かれているのを発見しました。奥田先生は、茶道を通した教育をされた方で、本県でも何度かご講演をされています。また、三水村の三水第一小学校には、奥田先生の提唱された法母庵の茶室があり、今でも小学生がこの茶室で地域の方からお茶の指導を受けています。奥田先生の教えの流れを受けた法母庵の皆様は、月に一度の禅生活として、当山の参禅会においてになっており、作務に励んで頂いています。そんなことから奥田先生を知っていました。私は大村はま先生のこの文を読んで、教育の真髄とはこういうものかなあと、大変感動しましたのでここにご紹介したいと思います。（154頁）

『私はかつて、都立八潮高校（当時、府立第八高女）在職のころ、奥田正造先生の毎週木曜の読書会に参加していました。奥田先生は、そのころ成蹊女学校の主事をなさっていました。先生は私が今までお会いした先生の中で、いちばんこわい先生でした。それで、読書会に行くときも、気をつけて、どなたかがすでに到着しているあとに着くように、つまり、先生と二人にならないように気をつけておりました。その日も、私は、じゅうぶん計算して行ったのですが、どうしたことか、だれもまだ見えてなく、私は先生と二人きりになってしまいました。

先生の前でかしこまって緊張している私に、先生は急に「どうだ、大村さんは生徒に好かれてるか」と、お尋ねになったのです。私は、はたと、返事に困りました。好かれていると言えばどういうことになるか。好かれていないと言えばどういうことになるか。瞬間、子どものようにぶるぶるふるえてしまいまして、やっと、「嫌われてはいません」という、へんな返事をしました。先生は「そう遠慮しなくてもいい、きっと好かれているだろう。学校中に慕われているに違いない。」と言って、お笑いになりました。私は、どうしてよいかわかりませんので、下を向いてもじもじしていますと、先生が一つの話をしてくださったのです。

それは「仏様がある時、道ばたに立っていらっしゃると、一人の男が荷物をいっぱい積んだ車を引いて通りかかった。そこはたいへんなぬかるみであった。車は、そのぬかるみにはまってしまって、男は懸命に引くけれども、車は動こうともしない。男は汗びっしょりになって苦しんでいる。いつまでたっても、どうしても車は抜けない。その時、仏様は、しばらく男のようすを見ていらしたが、ちょっと指でその車におふれになった。その瞬間、車はすっとぬかるみから抜け

て、からからと男は引いてしまった。』という話です。「こういうのがほんとうの一級の教師なんだ。男はみ仏の指の力にあずかったことを永遠に知らない。自分が努力して、遂に引き得たという自信と喜びとで、その車を引いていたのだ』こういうふうにおっしゃいました。そして「生徒に慕われているということは、たいへん結構なことだ。しかし、まあいいところ、二流か三流だな」と言って、私の顔を見て、にっこりなさいました。私は考えさせられました。日がたつにつれ、年がたつにつれて、深い感動となりました。そうして、もしその仏様のお力によつてその車がひき抜けたことを男が知ったら、男は仏様にひざまずいて感謝したでしょう。けれども、それでは男の一人で生きていく力、生きぬく力は、何分の一かに減つただろうと思いました。仏様のお力によってそこを抜けることができたという喜びはありますけれども、それも幸福な思いではありますけれど、生涯一人で生きていく時の自信に満ちた、真の強さ、それにははるかに及ばなかつただろうと思う時、私は先生のおっしゃった意味が深く深く考えられるのです。』